

評・三浦 佑之 (古代文学研究者)
立正大教授

舞台は海辺にある地方都市、時は昭和六十三年七月、主人公は十七歳の誕生日を迎えたばかりの篠垣遠馬という少年。読み進めると、今から23年前の出来事にしては、描かれる世界がずいぶん古くて懐かしい感じがしてくる。適切な比喩になっているかどうかわからないが、中上健次の小説を読んでいるような気分である。

そこからなお進むと、おそらく「父殺し」がテーマになるはずだと思わされる。父と似ていると感じた時に高校生が抱く嫌悪感、私にも覚えがある。ましてや遠馬にとって、性交渉の最中に相手に暴力を振るうという倒錯的な行
強い母と自立できない男



◇たなか・しんや=1972年、山口県生まれ。芥川賞を受賞した。『切れた鎖』など。

為を繰り返すことで快感を味わう父親の、その血を受け継いだ自分への忌まわしさを意識した時、それを克服する唯一の手段は「父殺し」しかないはずだと思ふからだ。ところがこの小説は、そのように進むとはしない。

遠馬は、父親の円と、その妻の琴子という女と三人で住んでいる。遠馬を生んだのは仁子と言ひ、倒錯的な性癖をもつ円を嫌って、生んだ子を置いて家を出たが、すぐ近所で独りで魚屋を営んでいる。空襲で家を焼かれて下敷きになった時に右手首を失ひ義手を着けているが、上手に魚や鰻を捌くことができる。そこに遠馬はしょっちゅう出入りし、前の川で父のためには鰻を釣る。この生みの母の存在感がとてもよい。義母にあたる琴子の感じも、琴子と仁子との微妙な関係もよくわかる。描写力のある作家だ。遠馬には一ツ年上の恋人会田千種がいる。性的な関係をもつが、恐れていた通り父と似た行為に及んだために絶縁状態になっている。そんな折の夏祭りの日、危ういながらもかろうじて保たれていたバランスが、一気に崩壊する。

ずいぶん売れているようだが、暴力的な性描写が多く、読者を選ぶ小説ではないか。ただ、だれが読んでも遅しい母たちの姿は印象深く刻まれるに違いない。そして、男たちが自立できないのはそのせいかもしれないと思わされる。

共喰い

田中慎弥著

集英社 1000円